

四季

ジュゼッペ・アルチンボルド



春

板、油彩 66×50cm 1563年
王立サン・フェルナンド美術アカデミー美術館蔵
(スペイン)

※中学校教科書「美術2・3」P.21に掲載

絵画を読み解く楽しさ

ありとあらゆる絵画表現に慣れてしまった現代日本人は、アルチンボルドの「寄せ絵」を見てもあまり驚かないかもしれない。

だが、彼の生きた大航海時代は、人々の関心が広い世界へ向けられ、珍奇な物への知識欲と所有欲が猛然

と沸き起こった時代だった。王侯貴族は個人の動物園や植物園を作り、富裕層の間では「驚異の部屋」と呼ばれるコレクション・ルームが大流行した。

アルチンボルドは、神聖ローマ帝国皇帝三代に仕えた宮廷画家である。皇帝や宮廷人たちの伝統的肖像画も手がけたが、彼の本領は植物や動物

で人体を構成するという斬新な手法と、緻密で正確な描写力にあった。

代表作「四季」は春夏秋冬の4作から成り、制作にあたっては皇帝の植物園へ自由に入出入りしてスケッチを許された。つまりこれらに描かれた植物は、皇帝コレクションの充実ぶりをも世に知らしめるものなのだ。「春」を見てみよう。

ここには何と80種類もの草花が描き込まれ、春の擬人像を形成している。もちろん画家はふざけているわけでも、笑わせようとしているわけでもない。草花の巧妙な組み合わせで観る者の讃嘆を誘い、且つ正確な描写によって図鑑としての役目も担おうとした。宮廷人たちは華やかで意表を突く画面に酔うとともに、植物名をあてる謎ときの遊びをも満喫したのであろう。

画面右上、白百合が帽子の羽飾りにみたてられている。肌は各種の花びら、目はパンジー、頬は薔薇、歯はスズラン。顔が花に埋もれているのではなく、花が集まって顔になった。耳はアジア産のシャクヤク。画面左上にはトルコ産のチューリップも見える。遠い異国から輸入した種子を皇帝の植物園が見事に花咲かせ、且つ改良を加えたことまで伝える。

絵は感じればいい——我々はそう習ってきたが、近代以前の西洋絵画はもっぱら知的階級のものであり、必ず意味と意図があった。それを理解できるようになれば、絵画鑑賞はもっと楽しくなるだろう。

北海道生まれ。早稲田大学大学院修士課程修了。作家、ドイツ文学者、西洋文化史家、翻訳家。西洋の歴史や芸術に関する雑誌連載、書籍などの執筆のほか、講演、テレビ出演など幅広く活躍。著書に『怖い絵』シリーズ(角川文庫)、『名画の謎』シリーズ(文藝春秋)、『怖いへんないきものの絵』(幻冬舎)など。2017年「怖い絵展」監修。

中野京子
なかの・きょうこ



夏

板、油彩 67×50.8cm 1563年
ウィーン美術史美術館蔵
(オーストリア)



秋

キャンバス、油彩 76×63.5cm 1573年
ルーヴル美術館蔵
(フランス)



冬

板、油彩 66.6×50.5cm 1563年
ウィーン美術史美術館蔵
(オーストリア)